

看護学生が行った大学生へのエイズ啓発活動における ピアエデュケーションの効果

田中 小百合^{*1)}, 松川 泰子²⁾, 徳重 あつ子³⁾

¹⁾ 明治国際医療大学看護学部, ²⁾ 前明治国際医療大学, ³⁾ 摂南大学看護学部

要 旨 【目的】保健師とともに地域看護学実習の一環として行ったエイズ啓発活動をとおして、活動を行う者の立場から看護学生が感じたこと、学んだことを把握する。
【方法】対象は2010年12月の地域看護学実習中に啓発活動を行った3年生6名である。実習終了後に「啓発活動を行って感じたこと・学んだこと」の自由記述の調査を実施した。自由記述の分析は内容分析の手法を参考に行った。
【結果】自由記述の内容は『青少年のエイズに対する認識』『啓発活動の意義を実感』『啓発活動を行った看護学生の思い』の3カテゴリーに集約された。
【考察】啓発活動の実施は、その意義やピアエデュケーションの実際を体感し、集団・地域へ働きかける保健師活動を知る機会になっていた。看護学生自身のエイズに対する捉え方にも良い変化をもたらしたことから、今後も啓発活動を実施する機会を設定し、看護学生として、青少年としてエイズを学ぶ場を確保していく重要性が示唆された。

Key words 看護学生 student nurses, 啓発活動 educational activities, エイズ human immunodeficiency virus/acquired immunodeficiency syndrome, 大学生 university students, ピアエデュケーション peer education

Received October 16, 2013; Accepted March 3, 2014

1. はじめに

エイズ発生動向調査によると、日本は地域的にも年齢的にも HIV 感染者・AIDS 患者報告数は増加傾向にある¹⁾。特に20~30代までの若年層が多くを占めている。この状況を踏まえた国のエイズ対策には、家庭・地域・学校・職場等へ向けた普及啓発及び教育について効果的に取り組み、行動変容を起こしやすくするような環境を醸成していくことの必要性が述べられている²⁾。エイズ等感染症の身近な窓口である保健所保健師は、京都府エイズ予防月間である12月にエイズ予防普及啓発活動(以下、啓発活動とする)を各地で実施している。その期間と地域看護学実習が重なるため、保健師の提案により本学において啓発活動を行うこととなった。

京都府はエイズ等正しい情報伝達のために、青少

年を中心に啓発活動を行うボランティアグループ「紅紐」と協働した取り組みを展開している³⁾。本学でもポスターによる「紅紐」のメンバー募集の呼びかけを行ったが、反応はみられなかった。調査からみた大学生のエイズの関心度は、関心がある一般大学生は63.3%⁴⁾、恋人とHIVの話をすることを考えたことがない看護学生は57.3%であった⁵⁾。エイズに関心があるとはいえない青少年の現状を踏まえると、今回の保健師とともに行う大学生対象の啓発活動は、保健師活動を直に学ぶ場になると同時に、エイズに対する青少年の現状把握の機会になると思われる。看護学生が同世代に対して啓発活動を行った報告はみられないことから、活動を行った者の立場から感じたこと、学んだことを明らかにする目的で看護学生に対して自由記述の調査を行った。その内容を報告する。

* 連絡先: 〒629-0392 京都府南丹市日吉町保野田ヒノ谷6-1
明治国際医療大学看護学部
E-mail: sayutana@meiji-u.ac.jp

II. 研究方法

1. 対象

2010年12月の地域看護学実習中に啓発活動を行った3年生6名（以下、看護学生とする）である。

2. 実習内容

本学の地域看護学実習（3週間）は、保健所と管内市町村での実習を主として3年後期から4年前期まで領域別の順不同なローテーションのなかで実施している。地域看護学実習は「個人・家族・集団・地域を対象とした健康問題の解決および予防をめざした看護活動を実践できる基礎的能力を養う」という目的のもとに、市町村・保健所での実習を行っている。

啓発活動に際し、看護学生はエイズの発生動向や活動の実際に関する説明（30分）を保健師から受けた後、保健所所蔵の「HIV／エイズが誰にもわかるDVD」による自己学習（30分）を行った。その数日後、本学構内にて大学生が多く集まる昼休みに60分間の啓発活動を行った。保健師3名とともにエイズ予防月間等のメッセージを発しながら啓発グッズを手渡していった。啓発グッズは、12月がエイズ予防月間であることと検査は無料・匿名で受けられるという内容が書かれた使い捨てカイロとボールペンであった。

尚、自己学習に使用したDVDの内容は、大学生がグループディスカッションを通してエイズが他人事ではなく身近なものであるということを学んでいくという内容であった。

3. 調査方法

実習終了後に「啓発活動を行って感じたこと・学んだこと」の自由記述による調査を実施した。

4. 分析方法

自由記述の分析は内容分析の手法⁶⁾を参考にした。まず、自由記述の文章から啓発活動を行って感じたこと・学んだことを表している内容を抽出したあと、意味内容をコード化した。相違性および類似性に留意しながら文章を分類し、抽象度を上げてサブカテゴリーを生成した。さらに、サブカテゴリーの相違性および類似性に留意しながら分類・整理し、カテゴリーを生成した。本文中ではカテゴリー名を『 』、サブカテゴリー名を《 》、コード名を〈 〉で表記する。

5. 倫理的配慮

本研究は所属する大学の倫理委員会の承認を得て行った（番号22-95）。対象者に対し、口頭および文書にて研究目的、方法、研究協力は任意であること、参加拒否による成績等への不利益は全くないこと、途中で拒否することも可能であること、研究データは記号化し個人を特定しないこと、またデータは研究以外に使用せず処理すること等を説明し、承諾が得られた対象者からは同意書に署名を得て、無記名による調査を実施した。

III. 結果

自由記述の文章から34個の意味内容が抽出され、それらは16個のコード、8個のサブカテゴリー、3つのカテゴリーに生成された（表1）。1つ目のカテゴリーである『青少年のエイズに対する認識』のサブカテゴリーは、《無関心な青少年の実態》《関心を示した青少年の存在》、2つ目のカテゴリーである『啓発活動の意義を実感』のサブカテゴリーは、《正しい知識の習得の大切さ》《身近な事柄として捉える契機になる》《行動変容につながる》、3つ目のカテゴリーである『啓発活動を行った看護学生の思い』のサブカテゴリーは、《活動前の消極的な思い》《活動の肯定的受け止め》《同世代が行う意味を感じる》であった。

IV. 考察

啓発活動の体験についての調査から3つのカテゴリー、8つのサブカテゴリーが抽出され、図1のように関連づけられた。啓発活動に関する研究は、医学生や看護学生が小中高生に対して性教育を行ったピアエデュケーションの効果を検討した報告が多い⁷⁻⁹⁾。ピアエデュケーションとは、テーマについて“正しい知識・スキル・行動を共有し合うこと”であり、身近で信頼できる仲間が教えてくれることで興味・関心をもつため、主体的な行動変容を支えるといわれている¹⁰⁾。看護学生は《無関心な青少年の実態》と《関心を示した青少年の存在》から『青少年のエイズに対する認識』を実感していた。〈エイズは恥ずかしい病気だと思っている〉〈エイズに興味がない〉という《無関心な青少年の実態》を目の当たりにしたことで、偏見の存在や自覚症状のない対象への予防的働きかけの困難さと啓発活動におけるピアエデュケーションの重要性を体感できたと思われる。

啓発活動を行う側である看護学生にも、〈エイズ

表1 エイズの啓発活動から感じたこと・学んだこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
青少年のエイズに対する認識	無関心な青少年の実態	エイズに興味がない エイズは自分に関係ない 正しい知識を知らない エイズは恥ずかしい病気だと思っている
	関心を示した青少年の存在	エイズに関心のある人もいる 活動中にエイズに興味を示した
啓発活動の意義を実感	正しい知識の習得の大切さ	間違った知識などが広がらないために啓発活動は大事 知識の共有から偏見が減っていく DVDを使用するとより理解しやすい
	身近な事柄として捉える契機になる	エイズを身近なものとして捉えてほしい エイズのことに触れる良い機会になった
	行動変容につながる	啓発活動によって検査に行く人が増える
啓発活動を行った看護学生の思い	活動前の消極的な思い	啓発活動に乗り気ではなかった エイズは自分に関係ないと思っていた
	活動の肯定的受け止め	自分たちにとっても良い機会になった
	同世代が活動を行う意味を感じる	同大学の学生からだに啓発グッズをより受け取りやすかったと感じる

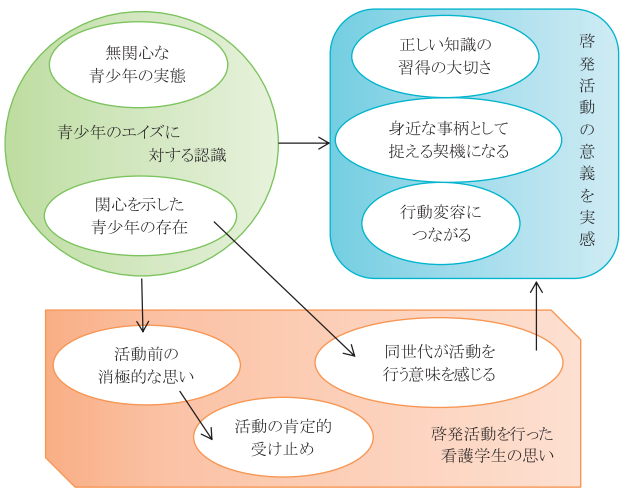


図1 抽出したカテゴリーの関連図

は自分に関係ないと思っていた」と一般の青少年^{4,5)}と同様の無関心さがみられた。大学や保健師からエイズに関する講義を受けたにもかかわらず、青少年のエイズに関する興味のなさは深刻な状態であるといえる。〈啓発活動に乗り気ではなかった〉こともわかり、実習という強制力が作用したと思われる。啓発活動の目的や実習での意味づけについて再確認する必要が示唆された。しかし、実施後に〈自分たちにとっても良い機会になった〉と《活動の肯定的受け止め》への変化がみられた。《無関心な青少年の実態》が反面教師になったと思われる。実習の一

環として啓発活動の機会を設定した理由として、看護学生という青少年たちへの健康教育という保健師の意図もあったと推測された。また、『啓発活動を行った看護学生の思い』の1つに《同世代が行う意味を感じる》というピアエデュケーション¹¹⁾を連想させる学びがみられた。事前に視聴したDVDの作用ともいえるが、健康教育を行う側がこの効果的な手法の1つを体感できたことは実習での大きな学びである。ピアエデュケーションの受け手と送り手の双方で変化がみられたことから、エイズの理解の壁になっている偏見や自覚症状のない病気への無関心に対する教育法としてピアエデュケーションが優れていることが確認された。

同世代である大学生が、啓発活動中にエイズに関心を示した反応は看護学生の手応えになり、ピアエデュケーションの学びと合わせて、《正しい知識の習得の大切さ》《身近な事柄として捉える契機になる》《行動変容につながる》という『啓発活動の意義を実感』することに繋がっていた。看護学生にとって〈啓発活動に乗り気ではなかった〉実習体験であったが、ヘルスプロモーションの理念に基づいた集団・地域へ働きかける保健師活動¹²⁾を知る有用な機会であったといえる。

V. おわりに

分析対象は6名と少数であり、標本数が充足して

いるとはいえないが、啓発活動を実施することによって同世代のエイズへの関心度を体感し、地域保健活動における啓発活動の意義、ピアエデュケーションの実際を理解していたことが明らかになった。啓発活動を行う側のエイズに対する捉え方にも良い変化をもたらしたことから、今後も啓発活動を実施する機会を設定し、看護学生として、青少年としてエイズを学ぶ場を確保していく重要性を感じた。

謝辞：看護学生に啓発活動の機会を与えて下さいました保健師の方々に厚く御礼申し上げます。

文献

1. エイズ動向委員会報告:エイズ予防情報ネット, 2013-7-30, <http://api-net.jfap.or.jp/status/index.html>.
2. 厚生労働省：後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針の改正について (2012), 2013-8-20, <http://www.okinawa.med.or.jp/doctors/.../34h240126chisan219.pdf>.
3. 京都府：STOP AIDS 京都府 HIV・エイズ情報 (2013), 2013-8-20, <http://www.pref.kyoto.jp/kentai/stopaids.html>.
4. 田辺毅彦, 柴田利男, 大島寿美子：エイズ予防に関する大学生の問題意識の調査 効果的なエイズ予防プログラムのために. 北星論集 (文), 43(1): 101-111, 2005.
5. 中桐佐智子, 合田ひろみ, 岡本陽子ら：看護学生のエイズに関する知識と意識・性行動の調査. インターナショナル Nursing Care Research, 9(3): 51-61, 2010.
6. Klaus Krippendorff：三上利治, 椎野信雄, 橋元良明訳：メッセージ分析の技法「内容分析」への招待. 勁草書房, 東京, pp 21-39, 1989.
7. 剣陽子：医学部公衆衛生学実習の機会を用いたピア・エデュケーションによる性教育の試み. 産業医科大学雑誌, 24(3): 257-269, 2002.
8. 栗田佳江, 杉原喜代美, 池田優子他：思春期ピアエデュケーションと高校生の性に対するイメージとの関連. ヘルスサイエンス研究, 12(1): 45-50, 2008.
9. 上田伊佐子, 高木彩, 川西千恵美：性のピアエデュケーションにエデュケーターとして参加した看護学生の体験と自己肯定意識の変化. The Journal of Nursing Investigation, 9(2): 1-8, 2011.
10. 日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会：ピアカウンセリング・ピアエデュケーションとは, 2013-8-20, <http://www.jpcaea.net/pia.html>.
11. 渡部基, 野津有司：我が国の学校における性・エイズ教育のピアエデュケーションプログラム開発の展望 中学生・高校生を対象としたプログラムの比較. 日本健康教育学会誌, 13(2): 68-76, 2005.
12. 地域における保健師の保健活動に関する検討会：地域における保健師の保健活動に関する検討会報告書, 2013-9-12, http://www.jpha.or.jp/sub/pdf/menu04_2_h24_02.pdf.